

TOPICS  
1

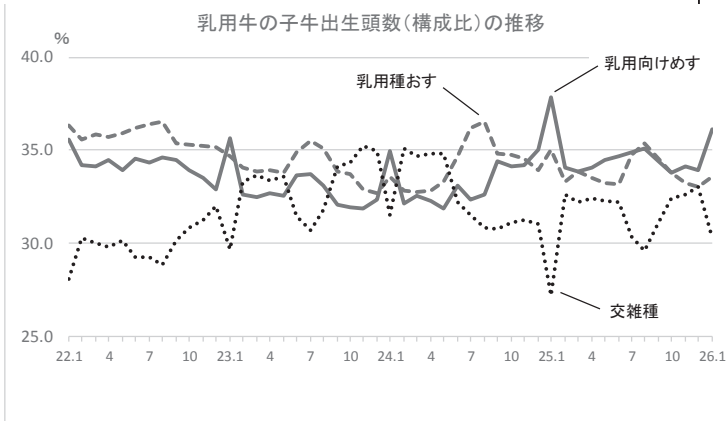
トピックス…①

# 乳用種の性別出生頭数が逆転

農林水産省「畜産統計」によると、乳用種の年間出生頭数（平成25年2月～平成26年1月）において、「めす」が「おす」を初めて上回った。乳用種における出生子牛の性別が逆転した背景には、性選別精液の利用が普及したことがあると言われており、このことは搾乳後継牛の安定的な確保に貢献することが期待されている。

## 乳用種の性別出生頭数の推移

統計によると、乳用牛から生まれる子牛の性別（「めす」対「おす」）は、かつて「めす」100に対して「おす」105～108であったが、近年その差が縮小傾向にあり、ついに平成25年に逆転した。「畜産統計」では、乳用牛の出生頭数を「乳用向けめす」、「乳用種おす」、「交雑種」に区分し、公表前年2月から当年1月までの1年間にわたり月別に集計した数値が掲載されている。図は、この出生頭数を構成比として示している。同図をみると、平成24年11月まではほとんどの月で乳用種の「おす」が「めす」を上回っていたが、それ以降は逆転したことがわかる。



資料：農林水産省「畜産統計」

乳用牛における子牛の性別が生乳生産に影響を及ぼし始めるのは、生まれた子牛の育成期間と妊娠期間を経た約2年後である。しかし、乳用牛の成畜頭数が減少を続けている近年において「乳用向けめす」の出生比率の向上は、搾乳後継牛の安定的な確保にとって望ましい傾向であると言えよう。ちなみに、平成25年2月から平成26年1月までの1年間に生まれた乳用種の性別は、「めす」100に対して「おす」98となった（表参照）。

また、後継牛を残したい母牛から効率的に「めす」が

生産できれば、搾乳牛の更新や増頭が容易になるばかりか、そのほかの母牛によって交雑種や受精卵移植による和牛など肉用素牛の生産も可能になる。図に示したように、近年における乳用牛の子牛出生頭数に占める交雑種の比率は30%を超えている。交雑種の価格は高水準で推移しており、酪農経営における収益改善の一助となっている。

## 搾乳後継牛の効率的な生産

家畜繁殖技術の目覚ましい発展にもかかわらず、世界的な傾向として、20世紀後半から牛の繁殖性が徐々に低下してきており、わが国においても同様の傾向が認められる。とくに、経産牛での受胎率の低下が指摘されている。このような状況の中で、広く普及している人工授精は、人と牛との「共同作業」なので、受胎率の低下には人側の要因と牛側の要因が複雑に関与していると言われる。

すでに述べたように、性選別精液を利用すれば後継牛生産が効率化できるが、その普及率は10%程度であると言われている。わが国では2003年に性判別精液の供給が開始されたが、その後も目に見えて普及しているわけではない。性選別精液の弱点は経産牛での受胎率が性選別していない通常の精液と比べて低いことであり、これが普及にあたり最大の障害となっていた。しかし、最近になって、家畜改良事業団が開発した二層式新ストローの活用により、経産牛、未経産牛ともに、通常の精液と比較して遜色のないレベルまで受胎率が向上することが確認された。

雌雄産み分け技術のような新たな技術は、その利用者である酪農家に有用性が認められ、生産現場で実際に利用されたときに初めてその真価が発揮されることは言うまでもない。したがって、今後のさらなる普及を期待したい。

## 乳用種の出生頭数と性別の推移

単位：頭、%

		19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年
頭数	おす	276,000	281,200	287,700	278,500	257,900	258,100	247,700
	めす	254,800	263,900	272,100	267,000	248,900	251,400	252,100
性別	おす	108.3	106.6	105.7	104.3	103.6	102.7	98.3
	めす	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：農林水産省「畜産統計」

注) 各年は当年2月～翌年1月、性別は「めす」を100とした値である。